

我が夫は伊勢の濱邊の萩を折り敷いて、旅寢をされてゐられることであらう。あの人氣のない淋しい海岸で。

碁檀越このだむをが、伊勢の國に往つた折、その妻が旅路にある夫の上のことを思ひ遣つて詠んだものである。妻らしい落ち着いた愛情にみちた歌である。女性は、戀を得たときには小童子たはらの如く、愛の對象がはつきりと定まつたときには、もはや、母親としての本能が動くのであらうか、羽がひの中にじつと温めるやうな落ち着いた愛情が、愛の對象の周邊にしつとりとした霧のやうに、立ち籠むるのである。

吾背子が著せる衣の針目落ちず入りにけらしな我が情さへ（卷四・五一四）阿部郎女

貴方の著てゐらつしやるお召物の縫目の一つ一つに、私の心までしみ入つてしまつたものと思はれます（斯うしてお別れはしてゐても、心は少しも貴方のお側から離れては居りません）

歌の趣から推し量つて、「著せる衣」とあるのは、作者が丹精して縫つて贈つた著物であると推定されよう。この歌には、もはや、少女の域を脱した、一本立ちの女性らしいやさしさが表はれてゐる。切實な愛情も、外へ向つて放射されるより、内に向つて豊かな量を加へてゆくといつた、母親らしい氣持にみちてゐるものとも言へよう。

つぎねふ 山城道やまぎを 他夫ひととよの 馬より行くに 己夫おのづまし 歩かちより行けば 見ることねに 哭なのみし泣
かゆ 其思おもふに 心し痛し たらちねの 母が形見かたみと 吾が持たる まそみ鏡あきつに 蜻蛉領巾あきつひれ 負
ひ竝ならめ持ちて 馬かへ吾背おのづま（卷一三・三三二四）

嶮岨な山城道やまぎを他女ひととの夫は、馬に騎つて行くのに私の夫は、歩いて行かれるのを見るたびにいとほしくて泣かれてならない。それを思ふにつけても胸が痛くなるやうである。されば、（嫁よめぐをり）母が形見にとて持たして呉れた、眞澄鏡まさらに、裝飾用の紗の布を添へて、價ともして馬を求めて下さい私の夫よ。

おそらく、名もなき旅商人の妻の歌なのであらう。貧しい夫を心よりいとほしむ妻の純心がのべられて餘すところがない。

夫は、此の歌に應へて左の一首を詠んでゐる。

馬買はゞ妹歩行ならむよしゑやし石は履むとも吾は二人行かむ（卷一三・三三一七）

（妹いもうとを具ともひて行くべきに）自分の馬を買へば、自分は馬に乗つてよくはあるが、お前はやはり歩かねばならないであらう。よしや石は踏むとも、二人相携へて楽しく歩いて行かうではないか。（鏡も領巾ひれも母君の形見であるから大切に持つてゐたがよい）

玉のやうな夫婦の情愛が、澄み切つて高く美しく讚賞措く能はない境地を示してゐる。かう言ふ醇乎たる感情の中に、夫婦愛の人倫が、磐石の重さをなして、民族生活の根柢を形造つてゐるのである。

其の愛情の世界に於て、純一を志向する女性の努力は、夫との生活に於て、全き人倫の理想を、家庭の場に築き上げるものである。女性の道德観、貞操観と言ふものは、強ひられてなつたものでなく、なべて、その本然の趨く資質に基づくものである。日本の女性にはいつそう、この天賦の資質が厚く蔵されてゐたのではなかつたか。女性の純一に徹する態度は又男性の要求するものでもあつたが、それは、男性の要求によつてのみそれが果されるものではなく、寧ろ、女性の純一にならうとする努力から、それは形成されて來た女性に本具する精神生活の美しき姿であつた。これは、作られた道德ではなく、またつくられた社會の規矩準繩ではなかつた。されば、純一に生きる女性の美しさと言ふものは、世の約束を固く守るところにあるのでなく、その本然の資質に基づいて生き抜く美しさに、その高さが指摘されねばならないものである。

誰ぞこの屋の戸を押そぶる新嘗にまなむに我が背を遣りて齋いはふこの戸を（卷一四・三四六〇）

新嘗祭に我が夫を送り出して私が閉ぢ籠つて慎しみ齋うてゐる家の戸を、そのやうにも押し開かう

とするのは一體どこの人でせうか。

夫の留守を知つて、しのび來た男を、留守居の妻がきつく咎めた歌である。身を清らかに護らうとする女性の本能が、この歌をなさしめてゐるのである。生命の秩序は、人間の本来の姿に基づいたものでなければ力ある秩序とは言ひ難い。一人を相互ひに守り通すと言ふ人倫は、そのまゝ社會の人倫の根基をなし、國の秩序を不動にせしめる強い單位になるものである。父を中心にした「家」の系統を護る爲にのみ、女性の純一が求められたのではない。女性の純一にならんとする本来の要求が「家」の系統の無難を護持する結果を齎したのである。つまり一夫に殉ずると言ふ女性の道德的規範は、家の國家的生存の秩序のための規範でもある。例へば家族と言ふ生活秩序から家族法が生じ、身分的秩序からは身分法が出ると言ふが如くに、生命の秩序が規範を生むのであつて、觀念的に作爲された規範が秩序を作るのではないのであると言はれよう。之等の自覺の内容に就いては、種々哲學的論證を必要とせねばならぬのであるが、かゝる秩序、かかる道德の大根ともなるべき至醇なる情操の芽生えを、萬葉の歌に見出し得ると言ふことは、否定出來ないのである。

萬葉の歌が、「生活の文學」であると言ふことは、一般に指摘されてゐる點であるが、萬葉集に現はれた女性の歌は、二層この感をふかめるものである。生活の文學であると言ふことは、藝術のための文學、美のための文學と言ふ考へ方と相對的に言はるべきものなのであらう。その素材として現實的なものを拾ひ上げてゐるものも生活の文學であり、又いかなる素材と雖も之を現實的に

詠つたものをも尙生活の文學と言へるのであらう。素材と表現の手法、この兩者を含めて生活の文學と言ふのは一層適切であるかも知れない。然しながら、採り上げる素材、表現せんとする手法とも言ふもの外に、素材と表現との間にある作者の感動が、本然具足のものとして燃えあがつてこそ始めて「生活の文學」に生命の力が宿るのである。その生命の力といふものには、藝術的な感動に基づくものもあるし、單に悲喜哀歡の情が生まるまゝで躍動するものもありうる。どちらかと言へば萬葉に於ては、生きた悲喜哀歡の情が、稍々もすれば、藝術的感動を押しつけてゐる傾向があるのである。されば、それは、思惟や感覺の洗練を缺くうらみを生ずるわけであるが、一面生きた生活感情の露出の故に萬葉人の生活性が、かたにわれわれに迫つて來るのである。之は萬葉文學の人間性と言つてもよいであらう。然し、藝術的感動が主體的位置を占むるばあひ、それが、思惟や感覺の全き働きに於て藝術的に完全燃焼したばあひは、素晴らしい効果を齎すのであるが、多くのばあひ、藝術的感動の龜裂を恰かも感動の全てであるかの如く手法的に無理に纏めんとする誘惑が、屢々、技巧的破綻となつて露呈する危険は多い。いつばう、生きた感情を表はさうとする努力は、多く舌足らずな表現的缺陷を示すものではあるが、その眞情のまことさ、素直さが、却つて言外の力を得て、捨て難い感動を讀むものの側に與へるばあひが多い。萬葉の歌は、どちらかと言へば後者に屬してゐるものであり、さう言ふ意味に於て、生活の文學であり、人間性にあふれた性格を稟具するものであると言へよう。素より、生活感情と藝術的感動とが見事にミソグルされて立派な作

品をなしてゐるものもあり、萬葉としての高い文化的段階を示してゐるものも多くみられるのであるが、その基調はやはり生活感情の方にあつたと言ふことは争ひ難い。女性の作りなせる歌も亦、かう言ふわけあひによつて、歌作の甘味、拙劣の相違を品定めすると言ふよりは、實生活に根ざした偽りを知らぬ「まこと」の精神に貫かれてゐる人間的感情の高揚に、われわれは、時を超えた讚賞を捧げうるのであると思ふのである。

筆者は、主として以上のやうな心持の上から、本論を述べて來たのであるが、この貧しい章を閉ぢる爲に、情熱の歌人として萬葉女流歌人中、揺がない地位を占むる茅上娘子の若干の歌について紹介をしておきたい。

2 狭野茅上娘子の境涯

茅上の娘子——詳しくは狭野の茅上娘子。彼女に就いては、傳未詳である。然し官女であつたことは推定される。官女と言つても、掃除や點燈を當てがはれてゐた極めて身分の低い官女であつた。俊秀な青年官吏、中臣朝臣宅守との間に愛を得た。彼に就いても亦詳しい傳記は不明である。天平寶字七年正月壬子、從六位上中臣、朝臣宅守授從五位下、と言ふことが、その他若干の事柄と併せて記録に見えてゐる。

ところが、宅守は勅によつて流罪されてゐる。彼女を得てからいくばくも經ぬ後であつたらし

宅守の身邊にひき起された事件が、茅上娘子に妙からぬ衝動を與へてゐる。この事件によつて、彼女の精神的波瀾が、感動に充ちた歌を製作せしめた直接の動機となつてゐる。このやうな事件の以前にも、彼女はよい歌をもつてゐたかも知れない。しかし萬葉集卷十五の後半に蒐録されてある宅守との贈答歌六十三首の歌は、亡じ難い感動を人に感銘させずにやまない故、特にえらばれて記載されたものであらうか。

彼女の作風を一口に言へば、悲戀を歌ひ上げし情熱的な抒情歌人と言へよう。情熱的歌人であると言ふ點に於ては蓋し古今獨歩の境地を持つてゐるものと目されてゐる。萬葉集の垣を越えて、日本の文藝史上に於てもその比を見ないと言ふのは、あなたがち筆者の獨斷のみでもあるまい。愛の歌と言ふにはあまりにも慟哭に充ちた——慟哭にあふれたと言ふには、またあまりにも至醇な歌である。炎のやうにさかんに、水のやうに清澄とも言ひつべき抜き差しならない絶對の藝術的境地をそこにみる。それが、藝術的境地であると共に、そのまま彼女の生活的境涯に於ける精魂を傾け盡した人間的境地に基づく歌詠であることによつても十分注目に價するのである。

君が行く道の長路を繰り疊ね焼き亡ぼさむ天の火もがも（卷一五・三七二四）

貴方が只今から、いらつしやると言ふあの長い道を、くりたたんでしまつて、焼き捨ててしまふやうな天の火が降つてくれて欲しいものである。

人の心は「生命の危機」に臨んで異常な昂まりを示す。茅上娘子に取つて、宅守は生命以上の生命である。離れると言ふことは、生命の分裂を意味する。このやうな際にあつて、神の奇蹟を求め「神火」の時ならぬ救ひを熱禱してやまぬのは彼女の心理的必然である。綿々の情と言ふよりは、裂帛の氣合にも似た叫びである。天に木魄し、地に轟くばかりの全身全靈をしぼり切つた聲を、そこに聴かないであらうか。觸れなば焼けん炎の固まりをそこにみる心持がしてならないのである。それは、徒らなる自暴自棄の叫びではない。さう言ふ分裂した精神の異常さ、病的な狂騒では素よりない。このやうな比類を絶した生命感の張り、どこまでも、醇々乎たる魂の昂揚、精神の高調に根ざしてゐる。情熱の巖頭にすつくと立ち上つた女性が、双の手を組み、蒼天に熱き祈りを捧ぐる姿を、眼の邊りに彷彿する思ひである。

人の植うる田は植ゑます今更に國別れして吾はいかにせむ（卷一五・三七四六）

同じやうな年格好の男子の方は、田を植ゑてゐられるのに、貴方は田をお植ゑにならないで、今更、國を距ててわかれわかれになつて了ひました。一體私は怎うしたらよいのでせうか。

宅守は何も、田植をせねばならぬ身分の人ではない。折からの田植る時に、働いてゐる男達を眼の邊りに見、あきらめられない思慕の情を詠はんとするきつかけとしてその状景を捕へたのであらう。あの男達は國を去ることなく此の土地で働いてゐる。だのに貴男は遠くへ行つた。と言ふ態の着意であらう。このやうにも子供じみた發想の中に、實は娘子の焦躁感が躍動してゐるのである。

歸りける人來れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて（卷一五・三七七二）

（流罪が赦されて）歸國して來た人がいよいよ着いたと言ふことを聞いて、てつきり貴男のお歸りだと思ひ、嬉しさのあまり息が詰つて死ぬやうな氣が致しました。

天平十二年六月十五日、流人穗積、朝臣老等五人が大赦を得て、京に入つたのであるが、このときは未だ、宅守は赦されてゐなかつたのである。それを、宅守も亦彼等と共に、歸國するのかと彼女は思ひ込んでゐた。思ひを裏切られた心の様を、率直、大膽に吐露したのがこの歌である。「君が行く」と共に絶吟として推賞されてゐるものである。東の間の歡び、天にも登る氣持が、一瞬に寸断され、名狀し難い心の混亂を、「ほとほと死にき」と言ふ語で十二分に利かし抜いてゐる。こひまるぶやうな歡喜から氣息の切迫するやうな衝擊を浴びて、呆然なす術を知らぬ娘子の姿がまさ

まざと臉の底に浮ぶ。一首に籠むる眞率無比の響こそは、蓋し琴柱を壓して吾人の胸を貫くものと
言へよう。

3 傳説歌の理念

天武天皇四年吹黃刀自が、阿閉皇女と共に伊勢神宮に参赴ひし時十市皇女に奉つた歌として、左の一首がある。

河の上の五百箇磐群に草生さず常にもがもな常處女にて（卷一・二二二）

河のほとりにある多くの巖は（潺湲たる流れに洗はれて）草むすこともなく美しく光つてゐる。あのやうに美しくいつまでもむすめの若さを保つてゐたいものである。

ギリシヤの女詩人サッフオも、

常處女にて我あらむ

と唱つたと言はれてゐる。吹黃刀自のこの歌は、わが國文學にあらはれた最初の「處女讚美」の聲

であつた。古事記にみられうる、

「阿那邇夜志愛哀登古哀」

「阿那邇夜志愛哀登古哀」

の唱和のかた、「をとめ」に對して用ひられる「をとこ」（少男・壯士）の語が「童貞」を意味して用ひられたかどうかはさだかではない。しかし、「をとめ」に對する考へ方はわりに明確な概念をつくつてゐたことは、萬葉の歌詠にあらはれた用語によつてもあきらかである。人麿が、伊勢行幸に供奉せる宮女等を、都に留まつて想像した歌として、「英虞の浦に船乗りすらむをとめら等が珠裳の裾に潮満つらむか」（卷一・四〇）とあるが、これには、既に「をとめ」と言ふ言葉が出てゐる古い歌の一つである。菟原處女の墓をよんだもので、「處女らの後のしるしと黄楊小櫛生ひ更り生ひて靡きけらしも」（卷一九・四二二）には「處女」とみえてゐる。また赤人が神龜六年春三月難波宮に供奉せる時の作に「丈夫は御に立たし未通女等は赤裳裾引く清き濱邊を」（卷六・二〇〇一）には、「未通女」の文字で書かれ、「をとめ」はいつしか、けがれなきことを意味するやうになつて來てゐる。なほ、「橋の寺の長屋に吾が率宿し童女放髪は髪あげつらむか」（卷一六・三八二二）には「童女」として明確な處女性を、黒髪に托して詠つてゐる。さきの吹黄刀自の歌に

見える、「常にもがもな（いつまでもかはりなく）」永遠の處女でありたい。と言ふことは、女性の抱くふかい悲願であつた。まことに女性の清純をこよなきものにしようとする意欲は、既にこの國の古への頃より、人々の胸のうちがはにおほもとのねがひをはらんでゐたのではなかつたか。眞間の手古名や、菟原處女や、櫻兒や、鬘兒のやうな一連の傳説歌にまつはる寧樂時代の少女が、二人の男に思はれて、つひには自殺を以て、その可憐な心情の純一を永遠なものとなしてゐる。また詩人がこれに對して讚嘆の歌を惜しまなかつたことは、戀愛をして美しく潤化せんとするとともにまた一方に於て、若き女性の尊さを、處女性の純潔に置くやうになりつゝあつた、時代人心の動向をもあきらかに示してゐるものであると考ふるのはひとり私のみではない。

しかも、このやうな説話のなかには、一種の三角戀愛型とも言ふべきものが、抒情詩の骨子をなしてゐることに注目される。いつたい父權家庭時代にあつては、一人の男性を二人以上の女性が慕ふべき筈であるのに對し、逆に母權家庭時代にあつては、一人の女性を二人以上の男性が慕ひあらそふのは通則となつてゐるわけである。「萬葉集」にあらはれてゐるものは、男性が女性を慕ふところの母權家庭式のマトリアーキイ式の説話である。「女治」の殘光は、なほこの點にも一つの材料をのぞかしてゐるものと言へよう。

古に 在りけむ人の 倭文幡の 帯解き交へて 廬屋立て 妻問しけむ 葛飾の 眞間の手兒

名が 奥津城を 此處とは聞けど眞木の葉や 茂りたるらむ 松が根や 遠く 久しき 言のみ
も 名のみも吾は 忘れえなくに (卷三・四三二)

昔唐つたと云ふ或る男が(妻を迎へる爲に)美しい倭文織の帯を新たに締め替へ、小屋を新たに建てて言ひ寄つた、葛飾の眞間の手兒名の墓所は、此處であると聞いてはゐるが、眞木の葉が生ひ茂つてゐる爲であらうか、或ひはまた、齡を重ねた松のやうに久しい時を経たからであらうか、今は定かにそれともわかないのであるが、しかし、ゆかしい手兒名の物語に残る其の名のみは、忘れられないのである。

この長歌は、赤人の作であるが、反歌としてさらに二首がある。

吾も見つ人にも告げむ葛飾の眞間の手古名が奥津城處 (卷三・四三二)

名にし負ふ葛飾の眞間の手兒名の墓場の様を自分も見ることが出来た。此の模様を、まだ見知らぬ人に話して聞かしたいものである。

葛飾の眞間の入江にうち靡く玉藻刈りけむ手兒名し思ほゆ (卷三・四三三)

葛飾の眞間の入江に、水のまにまに靡いてゐる美しい藻を、刈り取つたことであらうそのかみの手兒名の姿が偲ばれてならない。

葛飾は、この歌の題詞に「勝鹿」と書かれてあるが、今の千葉縣東葛飾郡・埼玉縣北葛飾郡・東京都葛飾區一圓を指すと言はれる。「眞間」は千葉縣市川市大字眞間(京成電車市川眞間驛の東方)の地であつて、江戸川に注ぐ眞間川の北岸に當ると言ふ。「眞間娘子」は、この歌に歌はれてゐる傳説中の美貌のをとめであり、それを「手兒名」と言うてゐる。

眞間の手古名——聞くだに優しく美しいひびきをもつたロマンティックな名であるが、テコナと言ふ名義の由来については、まことにその解説が區々として興味がある。いささか論旨を外れるきらいがあるが、やはり古代の女性に關することでもあるので、諸説の一端を御参考までに若干紹介して置きたい。

賀茂眞淵『萬葉考』上總・下總・武藏地方の方言に末子を「てこ」と言ふから、「手兒名」は「てこの女」即ち末女兒の義であらう、と言つてゐる。

本居宣長『玉の小琴』妙兒又は貴兒の義の稱詞であらう、と、言うてゐる。

鹿持雅澄『萬葉集古義』手兒名は、娘子の名、(契沖が手兒名は、人の妻のところにて、名に

あるべからずといへるはおしあてなり) 手兒は愛兒の謂にて、負せたる名にてもあらむ
、(本居氏も、手兒名は、愛兒名にて、名は美稱なりと言へり、されどなべての女を、ひ
もく言ることとせむことは、いかなり) — 中略 — 手兒は、手の兒の意といひ、又妙兒の意
も言るもいかが、いづれ手兒名は、眞間娘子に限りて言れば、名なること疑無し。

荒木田久老『萬葉考楓落葉』「手兒」は東歌に「人皆の言は絶ゆとも埴科の石井の手兒が言な
絶えそね」(五三九八)「劍大乃身に添ふ妹をとり見かね音をぞ泣きつる手兒にあらなくに」
(三四八五)等の「手兒」と同じで、父母の手にある處女の義で、「な」は同じく東歌の「兒
な」(三四八六)「妹なう」(三四四六)「背なな」(三五四四)等の「な」と同じく、親
しみを添へる語と解くのである。

次田潤氏は『萬葉集新解』で、久老の解釋を最も妥當らしいと言はれ、「思ふに「手兒」は、
『萬葉集類林』に「今も東國には小女を美稱しててこと言ふと也」とあるから、處女又は小
兒の意の普通名詞であつて、「な」は東歌に特に用例の多い接尾語で、中央語の「ら」に相
當する親しみの意を添へる語である。即ち「手兒名」は上古の中央語の「處女ら」と同義を
表はす東國方言の普通名詞であつたのが、娘子の名に用ひられて固有名詞となつたのであら
うと言はれてゐる。

福井久藏氏は『有由縁雜歌に於ける女性』の論稿の中で、眞間といふはアイヌ語で傾斜を意味

する。その地形を見るに弘法寺のところから手兒奈の遺跡まで一つの斜面になつてゐて地名
の起りもそれだと首肯できる。と眞間とアイヌ語との關係をのべ、次いで「手兒奈といふは
手なづけの子女と一般に考へてゐるが、これは普通名詞でなくて固有名詞と見る譯にはゆか
ぬであらうか、青森や弘前地方では今日の子女も小刀をマギル、蝶々をテコナツコと呼んで
ゐる。陸奥地方では徳利をトツクリコ、茶碗をチャワンツコ、皿をサラツコなどコの一音を
附する習であるから、お花とかお蝶などいふにアイヌ語を用ひ、お蝶といふをテコナと呼ん
だものではあるまいか」と、新説を提示されてゐる。

右の如く諸説區々としてゐる。いまそれらの説を要約してみると、

- 眞淵・末女兒の義 (普通名詞)
- 宣長・美女又は貴兒の名詞 (普通名詞)
- 雅澄・眞間娘女に限りて言ふ名 (固有名詞)
- 久老・處女の義 (普通名詞)
- 次田潤・處女らと同義 (普通名詞)
- 福井久藏・お蝶といふ名義 (固有名詞)

と言ふ風になつてゐる。つまり、手兒名は、普通名詞であるか、固有名詞であるかと言ふ點をめぐ

つて諸説がなされてゐるやうである。然し、固有名詞は、その多くの場合、普通名詞から出發するものであるから、兩者何れを可とするかは速断されぬやうである。

更に松岡靜雄氏は、萬葉集論究に於て、テコナは、固有名詞ではなく、テコ、とナとの二語から成り立ち、ナは夫ナナ、妹ナロ等の用例によれば、敬稱ネの音便で、テコは、埴科の石井の手兒（三九八）、左和多里の手兒（三五四〇）とあるに徴して、或る身分の女性の稱呼として一般的に用ひられたもののやうである、と、その社會的位置を、人種社會學的側面から考察を加へられてゐる。つまり、「——案ずるに、原語はチ（靈）コ（子）で、女祝即ち巫をミコ（御子）、又はカムナギ（神之子）といふやうに、神前奉仕の女性を意味し、音便によつてテコとも轉呼したのであらう」と言はれてゐる。原始社會に於て女性の社會的優位を示した女巫の存在が、ここにもその繋がりをみせてゐるやうで甚だ面白い、うべなはれる説である。さらに氏は言ふ。

「——神田祭の手古舞も恐らくは此から出たので、女性が之に任ずることを例とする。下河邊長流の續歌林良材集卷上には「東俗の詞に女をテコといふ」とあるが、女子と同義語として用ひられた形跡はなく、上記石井の手兒及サワタリの手兒の如きも、たとへ巫祝ではなかつたとしても、衆人の敬愛を集めた特殊階級の女人であつたやうである」

さらに民族學的ひろがりの上から、

「——或は近世までポリネシヤ民族間に存したといふ容色が優れ、由緒の正しい娘から選ばれたサ

オアウルマ（少女の伴緒）と同様のものであつたかも知れぬ（太平洋民族誌三二二頁）——之を要するに葛飾の眞間に限らず、東國に於ては各地に此の稱號を繼承した美女があつて、異性の憧憬の的となつたのであらう。但し此テコは少しもこの名號所有者ではなく、美貌の故を以て古の手古奈に擬せられたことも有り得べきである」

と、精細に述べられてゐる。松岡氏の解説は、土俗學的（呪的）傾向に立脚して、國文學者とはぜんぜん違つた立場から立體的な相貌を帯びてのべられてゐる。このやうに、一語の解釋も、實に數多の角度からなされ得て、問題は無限に深まり、無限にひろがりゆくことが知られ得る。筆者の淺學を以てしては、到底、先人の靴の緒を結ぶことすら出來得ない。只、手古名に關する諸家の説を引用して、問題の所在を、御參考に供したい意向から御紹介申し上げたのである。

さて、論旨を本來の道筋に戻さう。山邊赤人が歌つた、葛飾の眞間の手兒奈の詠は、單に菓所を媒介とした回想に過ぎぬものであるが、次ぎの歌に依ると、かなり具象的に、傳説が細敘されて、手兒名の美しさが、美しさの故に身を殺さねばならなかつた物語が活き活きと詠はれてゐる。

鶏が鳴く 吾妻の國に 古に ありける事と 今までに 絶えず言ひ來る 勝鹿の 眞間の手
兒奈が 麻衣に 青衿著け 直さ麻を 裳には織り著て 髪だにも 搔きは梳らず 履をだに

穿かず行けども 錦綾にしきまの 中に裏める 齋いはひ兒も 妹に及かめや 望月もちづきの 満みれる面おもてわに 花の
如ごとく 咲さみて立てれば 夏蟲なつむしの 火ひに入るが如ごとく 水門みなと入いりに船ふね漕こぐ如ごとく よりかぐれ 人のいふ時
幾時いくときも 生なけらしものを 何なにすとか 身みをたなしりて 浪なみの音ねの 騒さわぐ水門みなとの 奥津城おくつぎに 妹が
臥ふせる 遠とほき代しろに ありける事を 昨日きのうしも 見みけむが如ごとく 念ねんほゆるかも (卷九・一八〇七)

あづまの國の大昔にあつたと傳へられて來た、勝鹿の眞間の手兒奈が、麻衣に青衿を著け、固かたい麻あでつくつた立派たてでもない裳もを著て、髪かみさへも 梳くしす、履はき物ものも穿はかないで出歩いでてゐるけれど、錦綾にしきまの中で育そだつた良家りやうけのむすめと雖なも、手兒名てにの美うしさにははるかに及およぶことはないであらう。望月もちづきのやうに光照くわ圓滿まんまんのかんばせで、パツとひらく花はなのやうに笑わらつた姿すがたは、類たぐひひを絶たする美うしさであつた。されば、夏の虫なつむしが好このんで火ひに飛とび入いるやうにまた湊みなとに向むかつて競あつて漕こぎ込こむ船ふねのやうに、手兒名てにの美貌びやうぼうに眩惑くらわくされて言いひ寄よる男子なんしの切實せつじつなあらそひがそこに起おつた。所詮ところせんは、假かりりの命いのちではあるし、いつまでも生き永ながらへるものではないと思おもつてか、または何なにと心得こころえてか、浪なみの音ねの高たかくさわぐ水門みなとに身みを投なげ、海うみの藻屑そうせつに化くわしたと言いふ手兒名てにの物語ものがたりは、遠とほい遠とほい昔語むかしごとりではあるが、まるで昨日きのう今日けふの邊へりに見みたものやうに思おもはれてならないことである。

勝鹿の眞間かたがきまの井いを見れば立ち平なみし水波みづなみましけむ手兒奈てに念ねんほゆ (卷九・一八〇八)

勝鹿の眞間かたがきまの井いを來きてみると、あの井いの邊へりにしばしば立つて水を汲くみんだであらう娘むすめ子の貌すがたが、まの

あたりにみゆるやうな心持こころもちがしてならない。

さきの赤人あかひとの歌は抒情的であるが、後の蟲麻呂むしまろの歌は、敘事的要素じよじてきよそに富とんでゐる。物語ものがたりをよくする詩人しじんとして蟲麻呂むしまろが、萬葉歌人まんやうかじん中なか特異とくいな地位ちゐを占おむるのはこれらの傳説歌でんせつかによつてである。

葛飾かきさきの眞間まゐの手て古名ふるなをまことかも吾われに依よずとふ眞間まゐの手兒名てにを (卷一四・三三八四)

自分が葛飾かきさきの眞間まゐの手て古名ふるなとしのびあつてゐると言いふ噂うわさが立つてゐるのは本當ほんとうなのであらうか、さやうの噂うわさが立つことをきくにつけても、古ふるへにあつたと言いふ手て古名ふるながしのぼれてならない。——と言いふことは自分の今の愛人あいじんが手て古名ふるなに似にてゐると言いふことを言いうたもので、古義ふるぎの言いへることく (かの手兒名てにをば、人の娶よめがてにしつめれば、しか言いよせらるゝをも、下したにはほこれる情なさけあるべし) いささか得意とくいでならなかつたのであらう。

葛飾かきさきの眞間まゐの手兒名てにがありしかば眞間まゐの磯邊いそへに波なみもとどろに (卷一四・三三八五)

眞間まゐの手兒名てにが、眞間まゐの磯邊いそへに立つてゐたので、打ち寄うする波なみも、其そのの姿すがたの艶麗えんれいをめでてとどろき

わたるやうに、人々の多く來り集うてさわいだことであつたらう。

赤人や蟲麿ならぬ、下總國の無名の人も、その美しさを極力詠ひあげてゐる。餘程、手兒名は美貌の持主であつたに違ひない。その歴史的實在に就いてはあづかり知る所ではないが、當時の人々が水死美人に對していかばかり浪漫的な興味と關心を寄せてゐたかがわかるのである。美の傳承の希求のかなたに、手兒名は燦として耀く女性美の理念ですらあつた。しかも二人の男性にいとまれといづれにも貞操をとげる事の出來ないのを悲しんで、死に行く戀の悲劇は、「望月の 滿れる面わに 花の如 咲みて」立つ感覺的な豊麗美に、精神的なものをも含めて、一層、手兒名に對する憧憬を高めていつたことであらう。

葦屋の 荒原處女が 八年兒の 片生の時ゆ 振分髪に 髪たくまでに 竝び居る 家にも見え
す 虚木綿の 隠りて坐せば 見てしかど 悵憤む時の 垣ほなす 人の誂ふ時 血沼壯士 蒐
原壯士の 廬屋焼き 進し競ひて 相結婚ひ しける時は 焼大刀の 柄押撚り 白檀弓 鞆取
り負ひて 水に入り 火にも入らむと 立ち向ひ 競へる時に 吾妹子が 母に語らく 倭文手
纏賤しき吾が故 丈夫の 争ふ見れば 生けりとも 逢ふべくあれや ししくしろ 黄泉に待
たむと 隠沼の 下延へ置きて うち嘆き 妹が去ぬれば 血沼壯士 その夜夢に見 取り續き
追ひ行きければ 後れたる 荒原壯士い 天仰ぎ 叫び哭び 地に伏し 牙喫み語びて 如己

男に 負けてはあらじと 懸佩の 小劍取り佩き 冬薯葛 尋め行きければ 親族共 行き集
ひて 永き代に 標にせむと 遠き世に語り繼がむと 處女墓 中に造り置き 壯士墓 此方彼
方に 造り置ける 故縁聞きて 知らねども 新喪の如も 哭泣きつるかも 段(後) (卷九・一八〇)

(九)

葦屋の荒原處女が、八歳ほどの稚兒であつた頃から、振り分け髪に、髪を結ぶ十五・六歳の頃まで、並んでゐる隣家にすら姿を見せず、家にもひき籠つて居るから、一眼見たいものだと思つても、垣のやうな人々が言ひ寄る時、血沼壯士と荒原壯士が、先を争つて申し込んだ時は、大刀の柄をおし撚り、白檀の材で作つた弓や鞆(矢を納れて負ふ具)を携へものしい勢ひで、水に入り火にも入らうと、立ち向ひ競争をした時に、その嬢子が母に告げるには、賤しい自分故、男子の争ふを見れば、生きてゐても逢ふべくもありませぬ、黄泉の國でお待ち致しませうと、それとなく下心を知らせておいて、ふかい嘆きを抱いたまゝ嬢子は逝つて了つた。血沼壯士がその夜の夢でそれを知り、續いて後を追つた。後れた荒原壯士は、天を仰いで叫び泣き、地に伏しては牙を嚙んで怒聲を發し、そんな男に負けてはならじと、小劍を佩いて、跡を尋ねて死んで行つたから、段(前)親族共が行き集り、この悲しい出來事を永い世の標にしよう、遠い世に語り繼がうと、處女墓の中に造り置き、壯士墓を此方彼方に造つて置いたと言ふ、その仔細を聞いて、知らぬ世のことではある

が、新しき喪に出合うたやうに泣いたことである。(後段)

この歌は、菟原處女の墓を見た折、高橋蟲麿が詠つた有名な長歌である。

前段に於ては、傳説の内容を極めて具象的に活寫する如く語り詠つてゐる。後段に於て、墓所(處女墓)の由來を、追想の感慨に託して述べ、主情をもつて結んでゐる。表現力の豊富さ多彩さは、蓋し驚くばかりである。そしてまたかくの如く複雑な言葉を存分に使用しながら、形式の過剰に轉落することなく、全體を貫く氣息の鋭さ、情熱の勇噴は、些のたるみもみせることなく、この長い歌を緊密に力強く統一してゐる。素晴らしい力侖と言ふべきである。しかしそれは、彼の作家的な力侖のみが、よくそれを成さしめたのであらうか。素材そのものは、手兒名の傳説と同じ型で、菟原處女を中心とする妻争傳説であり、その傳説を媒材とする回想である。回想と言ふことは別の言葉で言つて空想である。この空想——現實とは遊離した空想を素材としてゐるにも拘らず、それを詠はうとする蟲麿の態度は、非常に現實的である。従つてその作歌に當つての手法も現實的處置に貫かれてゐる。

「智奴壯士 宇奈比壯士の 伏屋焼き すすし競ひて 相よばひ しける時は 焼太刀の 柁押し
ねり 白楯弓 鞆取り負ひて 水に入り 火にも入らむと 立ち向ひ 競へる時に 吾妹子が 母

に語らく……」

また

「妹が去ぬれば 血沼壯士、其夜夢に見 取り續き 追ひゆきければ 後れたる 菟原男い 天仰
ぎ 叫び哭び 地に伏し 牙喫み語びて ところ男に 負けてはあらじと 懸き佩きの 小劍取り
佩き ところづら 尋め行きければ……」

これらの表現の切迫せる階調は、到底一片の空想によつてのみ産み出されたものではない。また、
「……故縁聞きて 知らねども 新喪の如も 哭泣きつるかも」

に於ける「哭泣きつるかも」は、回想の上で、感傷に沈溺せるぬるま湯の如きものでなく、生ま
ましい慟哭の聲に打ち顛へてゐるものである。

かくの如く急迫せる現實感、一人の美しき處女子を競うて、遂に死に到らしめた物語自體の持
つ悲劇性——謂はゞそのやうな人生の實相に對する、作家魂の人類の歎き、言ひ換ふればヒューマ
ンな働傷が凝集したところから生れ出た、烈しい人間性の昂揚に基づくものであると言へないであ
らうか。蟲麿の特色ある藝術を目して、「傳説藝術」であるとか、「表現力が豊か」であるとか、
「敘事詩家」であるとか、さまざまに批評を下して説をなす人があるが、それらの評言は現象の上
での底淺い枝葉末節の言ひ方であつて、その本質を洞察したものとは言ひ難い。一人の美人を競ふ
と言ふ人のさかの悲しさ、そしてまた競ふことを避けることの出来ない人間性の實相、かかる運命

的な闘争の犠牲となつた娘子の傷ましい美しさ——そのやうな人生と世界の宿命に對する作家魂のふかい嘆き、深沈な悲傷慟哭の絶叫が、回想をして單なる回想の所産として扱ふことをせしめなかつた。一片の空想的な昔物語として聽き過すことを許さなかつた。あくまでも「昨日しも見けむが如き」生ま生ましい精神の體驗として、彼の魂に喰ひ下つたのである。魂に喰ひ入つた素材が、猛烈な情熱を驅つて、現實味豊かな表現を得るのは、當然のことではないであらうか。しかもその敘事的手法の巧みとあひ俟つて一層光彩を放たしめたのである。ここに彼の藝術のたくましさや説く鍵がひそんでゐる。

葦屋の菟原處女が奥津城を往き來と見れば哭のみし泣かゆ（卷九・一八一〇）

葦屋の菟原處女の墓所を、行くとは見、來るとは見れば、ひたすら泣けてならない。

墓の上の木の枝靡けり聞きし如血沼壯士にし依りにけらしも（卷九・一八一）

處女墓の上に、（墓標に植ゑたと云ふ黄楊の）木の枝が血沼壯士の方に靡いてゐる。さては話に聞いたやうに、をとめの心は血沼壯士の方に傾いてゐたものであつたらう。

菟原處女は、血沼壯士と菟原壯士の兩方の男子に言ひ寄られて、身を喪つたのであるが、血沼壯士の方に傾いてゐたと言ふ傳説が、當時行はれてゐたとも推定されてゐる。此の説話は、平安前期の大和物語に入つて、生田川の話として短篇小説に進展してをり、謡曲となつて求塚を産んでゐる。なほ次ぎに示す大伴家持の歌では、塚の上の木は處女らが記念のための黄楊の小櫛が、生ひかはり生ひかはつて生えたものと言ひ傳へられてゐたことが知れるものである。

古に ありけるわざの くすはしき 事と言ひ繼ぐ 血沼壯士 菟原壯士の 現身の名を争ふ
と たまきはる 壽も捨てて 争に 嬌問ひしける をとめらが 聞けば悲しさ 春花の にほ
えさかえて 秋の葉のにほひに照れる あたらしき 身の壯すら丈夫の 語いたはしみ 父母
に 啓し別れて 家離り 海邊に出立ち 朝暮に 満ち來る潮の 八重浪に 靡く珠藻の 節の
間も 惜しき命を 露霜の 過ぎましにけれ（前）奥墓を 此處と定めて 後の代の 聞き繼ぐ人
も いや遠に しぬびにせよと黄楊小櫛 しか指しけらし 生ひて靡けり（後）（卷一九・四二一）

11

昔あつたと言ふ、世にも不思議のことが、言ひ傳へられてゐる。それは血沼壯士と菟原壯士が、男の名譽にかけて、生命を賭し、妻を競つた。その乙女のことを、きくにつけ悲しまれてならない。

春花のやうに、匂はしく、秋の黄葉のやうに照りかがやく青春の頃を、ますらをの言ひ合ひをふかく傷み、父母にそれとなく告げ、家を離れ、海邊に出で立ち、朝な夕な、満ちて来る潮に、(身を投げて)波間に靡く藻の短かい節々のやうに、つかの間も惜しいのちを、露霜のやうに、はかなく果ててしまった。(段前)そのおくつきを、こと定め、後の世に物語をきき繼ぐ人も、いつまでも偲んで欲しいとてか、(用ひてゐた)黄楊の櫛を、そのやうにもさしたものであらう、その櫛から、生ひ育つた黄楊の木が、今は葉も繁くなり、風になびいてゐると言ふことは、——(何とくすはしきことではないだらうか)

處女らの後のしるしと黄楊小櫛生ひ更り生いて靡きけらしも(卷一九・四二二)

處女が、後ち後ちまでもそのしるしにとてか、その黄楊の小櫛は生ひ代り生ひ代りして、生ひ育つた樹の梢は思ふ壯士の方に向つて靡き榮えることであらう。

家持の歌は、黄楊の櫛に關するくすはしきわざこそ、その詠歌の主點をなすものであつて、蟲麿の如く、傳説の主題に對し、眞向からきり込んでいつたものではない。従つて情熱の高まりもななく、格調に迫力を缺いてゐるものである。

これらの歌によつて、菟原處女が、血沼壯士に、ひそかに思ひを寄せてゐたと言ふ言ひ傳へのあることを思ふとき、いかにも處女らしい彼女の可憐さが、後の世の人の心に一層の魅力を添へて迫つたであらうことがしぬばれてならない。

春さらば挿頭にせむと我が思ひし櫻の花は散り去にしかも(卷一六・三七八六)

春になつたならば、挿頭にしようと思つてゐたその櫻の花は散つてしまった。

妹が名に懸けたる櫻花咲かば常にや戀ひむいや毎年としのほに(卷一六・三七八七)

あの兒の名前に懸けてゐる櫻花が、咲いたならば、毎年毎年何時までも變りなく戀を續けるでありませうに。

以上の二首の歌は、櫻兒と言ふ美人を二人の男性が、命をかけて奪ひ合ひ、櫻兒も亦、さきの二人の處女と同じ運命の下に置かれて、林の中で縊死を遂げたのであつた。それと知つて、哀惜のこころを抱いて詠つたのがこれである。この消息は、これらの二首の歌の題詞に次ぎのやうにのべられてゐる。

昔者娘女あり。字を櫻兒と曰ふ。時に二の壯士あり。共に此の娘を挑む。而して生を捐て格殺ひ、死を食りて相敵みたりき。ここに娘子歎歎きて曰く、古より今にいたるまで、未だ聞かず、未だ見ず、一の女の身、二つの門に往き適ふといふことを。方今壯士の意和平び難きものあり、妾死りて、相害ふことなく永く息めむには如かじと。乃ち林の中に尋ね入りて、樹に懸りて經死にき。其兩の壯士哀慟するに敢へず、血の泣襟に漣る。各心緒を陳べて作れる歌二首

とある。血の涙襟に流るるやうな哀慟の高まりは、この歌にみられない。歌としては上等の部類ではない。だがしかし、壯士の競ひを息めしめむとて、自らみまかつた處女に對する限りない愛憐の情は、大いに認めねばなるまい。題詞の中に「昔より今にいたるまで、未だ聞かず、未だ見ず、一の女の身、二つの門に往き適ふと言ふことを」とある。之は、恐らくは支那の儒教的思想の影響かとも思はれるのであるが、二夫にまみえざることを女子の道ともなしてゐる貞操觀念が、既にその頃奈良朝の末期に於ては、立派な婦道として思はれてあつたと言ふことを裏打ちするものであらう。

同じやうな形式の歌が、童兒に關しても三首みられる。題詞にはかうしるしてある。

或の曰く、昔三の男ありて、同じく一の女を擣ひき。娘子嘆息て曰く、一の女の身滅易きこと露の如く、三の雄の志平び難きこと石の如しと。遂に池の上に彷徨り水底に沈没き。時に其壯士等、哀顔の至に勝へず、各所心を陳べて作れる歌三首娘子字を童兒と曰ふ

無耳の池し恨めし吾妹子が來つづ潜かば水は濁れなむ（卷一六・三七八八）

耳無の池が恨めしい。吾が思ふあの子が入水したとなれば、池の水は濁れてなくなつてしまへばよいのに。

あしひきの山纒の兒今日ゆくと吾に告げせば還り來ましを（卷一六・五七八九）

童兒が今日行つてしまふことを一言自分に告げて呉れたならば、何はさて措いても、歸つて來たであらうものを。

あしひきの玉纒の兒今日の如いづれの隈を見つづ來にけむ（卷一六・三七九〇）

（童兒の通つたであらう道を歩きつゝ）童兒は、今日の自分のやうに、道のいかなる片隅をも、眺めながら來てゐたことであらう。

童兒に關するこれら三首の歌も、前の櫻兒の物語と同巧異曲で、後者は、投身の場所が耳梨池であつたやうだ。以上は、手兒名や菟原處女の説話と、同型のものではあるが、特に事古りた傳説と言ふ程のこともないやうであるとも推定されてゐる。作者と同じ時代に在つた出來事を聞いて、その男の身になぞらへて詠んだものでもあらうか。耳無の池に關係してゐるところから、童兒の話はほぼ藤原の官の時代であらうし、櫻兒も大體相前後せる時代のことであつたらう。その名より推して花にちなみのある吉野の邊に起つた話でなからうかと推定されてゐる。

これらの、傳説歌を通じてみられる所ものは、物語自體が、たいへん純朴で、陰慘でないと言ふことである。また、これらの物語のなかには、一貫して當時の女性のもてるきびしい倫理觀がはつきりあらはれてゐることは注目に價すると思ふ。

凡そ人類の婚姻制に三つの型が考へられてゐる。

- 1 一夫一妻 (Monogamy)
- 2 一男數女 (Polygamy)
- 3 一女多夫 (Polyandry)

がそれである。古事記の神々には第二のばあひが多いのにも拘らず、萬葉人の歌のなかには、第一

の例が尠くないのは注目すべきことである。ソロモンは「七百の妻、衆姫三百の妻」を誇負し、回教の經典コーランによれば、正妻四人を許し、妾はその數を制限してゐないと言ふ。秦の始皇帝も美姫三千を後宮に迎へて、その勢威をほしいままにしてゐる。素より、日本の社會に於て、その始めよりしてモノガミイが嚴守されてゐたとなす論は暴論に近いが、日本の國家體制が漸次に確立されてゆくとともに、一夫一婦の倫理觀は、日本民族の「一家」の觀念の成長とともにあきらかなひとつの理念となつて來てゐることは否み難い。このことはやはり、二夫にまみえることを潔しとしないう日本女性の嚴しい道德觀が、その大根になつてゐたからであらう。従つて人も亦、純一を保つ女性に對し讚仰の聲を送つたのである。されば、その貴きと賤しきとを問はず、數人の男の相挑むばあひ、みづから一命を捨て、誰にも隨はないといふ態度は、二君に仕へざるを本懐とせる武士道の精華と比して毫も劣ることなき高貴性を思はざるを得ないのである。極めて素朴な形に於てであるが、このやうな美しくして烈しい、立派な考へ方が、萬葉のもつ一連の傳説歌のなかに、その萌芽を胚胎してゐることは、日本の女性觀をうかがふよき料として、價值高く、評價さるべきことであらう。かう言ふ精神史上の問題としても、この傳説歌は、重要な意義をもつのである。

(出版會承認 5900八六號)

昭和十九年 九月十五日初版印刷

昭和十九年 九月二十日初版發行

(2,000部)



著者略歴

日本大學國文學科專攻。現在日本大學藝術科教務主任兼講師。「萬葉の生死觀」(昭和書房發行)の著あり。

上代日本と女性

定價 一圓八五錢
特別行爲稅相當額 一五錢
合計 二圓

著作者

石門寺 博ひろし

發行者

山形 始はじめ

印刷者

刈米 窪くぼ

發行所

文松堂出版株式會社
出版會會員番號 110072
東京都芝區新橋四ノ四六
電話 芝 四七八三・四八一三

配給元

日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町三ノ九

9 15 62

367.21

SE 33

